

薬師寺中心伽藍に至る寺域内東西道路の南側溝と考えられ、西流して西二坊大路東側溝の延長上に位置する南北溝SD二七八五に注ぎ込む。両溝は併存し、廃絶は近世に下る。SD二七九〇からは、他に奈良時代から室町時代にかけての軒瓦、室町時代頃の瓦質の播鉢、江戸時代の土師器（灯明皿としての使用痕跡あり）、漆器椀、灯明皿受台などが出土している。木簡は掲出の一点以外全て墨付きのみの断片である。

8 木簡の釈文・内容

(1)

〔一カ〕
 十〇月八日
 〔供カ〕
 廿一ケ度除□□□□ (3.8)×(3.7)×4 0.81

中世以降の祈禱札の類と考えられる木簡で、右辺と下端は原形を保ち、右辺上部には切り込みがあった可能性がある。左辺は欠損しており。上端も現状より若干長かったと考えられる。一定期間日光にさらされていたためか、文字が一部白く浮き上がって残り、斜光により釈読できる部分がある。

9 関係文献

奈良文化財研究所『奈良文化財研究所紀要二〇〇二』（二〇〇二年）

（年）

（渡辺晃宏）



奈良・旧大乘院庭園

きゅうだいじょういんていえん

- 1 所在地 奈良市高畑町
- 2 調査期間 二〇〇一年（平13）一〇月～二〇〇二年二月
- 3 発掘機関 奈良文化財研究所平城宮跡発掘調査部
- 4 調査担当者 代表 金子裕之
- 5 遺跡の種類 庭園跡
- 6 遺跡の年代 古代～近代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



（奈良）

調査地は平城京跡左京四条七坊東端部にあたる。奈良時代の元興寺禪定院の故地とされ、平安時代後期以降は興福寺の門跡寺院である大乘院となった。日本ナショナルトラストによる「名勝旧大乘院庭園保存修理事業」の一環の調査で一九九五年度以降継続して行なっており、過去にも木簡が出土した（本誌第二二号）。今回は西小池北端が想定される北区と、東大池南西部

の島を対象とする南区の計約五〇七㎡を調査した。主な検出遺構は西小池、中島、奈良時代とみられる柱穴列、中世の焼土面、近代の建物基礎、防空壕、テニスコートなどである。

木簡は北区の池SG八三二一埋立土から出土した。SG八三二一は、いくつかの小池が連なって形成される西小池の内、北端の池で、東西九m南北一四mのほぼ楕円形を呈する。中央部に島SX八三二二をとともなう。SG八三二一は室町時代に掘られ、改修を受けながら近世を通じて存続し、廃仏毀釈以降に埋め立てられた。池の埋立土からは、木簡三点以外に近代初期の学校関係遺物が多数出土した。片面に「ピンチャン」と墨書した直径五cm厚さ一・八cmの瓦転用円盤状遊具も出土している。周辺が明治時代前半に飛鳥小学校の敷地となっていたことと関連する。

8 木簡の釈文・内容

(1) 「。□年生」 62×21×7 011

(2) 「九四調新日 □ □ □ □
之」 21×275×11 061

(3) 「御笠
。事務□□」 450×168×10 011

(1)は上部に穿孔を有する木札。一字目は三もしくは五であろう。

(2)は石版の枰木。枰木の下辺にあたる横枰材とみられる。石版の石材も出土した。(1)(2)は飛鳥小学校に関連する。(3)は上部に穿孔を有する看板。腐蝕が激しく、一部に穴があいてしまうほどで、文字の浮き上がりなどでかろうじて読める。飛鳥小学校が移転した後に、事務所として使われていた際の遺物であろう。

9 参考文献

奈良文化財研究所『奈良文化財研究所紀要二〇〇二』(二〇〇二年)
(馬場 基)